はまなす通信

野田はまなす会会報
No.62（令和３年２月）
3・11東日本大震災特集号

写真：１年の幸福を願う大黒舞（令和３年小正月行事）

新年のご挨拶

会長　久慈　士郎

新年あけましておめでとうございます。

ご承知の通り、令和2年初めから新型コロナウイルス感染症が発端となり、日常の生活も大きく変化し「余裕や遊び」を失った自粛生活でご苦労された事と思いますが、無事に新しい年をお迎えになった事とお慶び申し上げます。

さて、令和2年度「野田はまなす会総会・交流会」はコロナウイルス感染拡大防止の観点から書面による議決とさせていただきました。会員の皆様のご協力に対し感謝申し上げます。

令和3年度の「総会・交流会」の開催についてはワクチン接種も進むなどわずかながら明るい兆しもあり、また、東日本大震災から10年目の節目でもあり何としても開催できればと願っております。

会場につきましては、ホテルラングウッド（山手線 日暮里駅近く）にて令和3年11月28日（日）に計画しており、皆様とお目にかかる事を楽しみにしております。

野田はまなす会の活動は「会員相互の親睦」・「ふるさと支援」の不変の目的があります。

新規会員の拡大と組織の充実強化の観点から世代を超え幅広く積極交流が出来る様、会員の皆様にも友人、知人を積極的にお誘いの上、参加いただければ幸いです。

一連のコロナは経済にも大きな打撃を与えました。そこで「ふるさと支援」で最も有効な手段として、帰省もままならない状況でありますが可能な限り「野田村観光物産館ぱあぷる」のネット情報を利用し、販路拡大と野田村の活性化に貢献していただければと思っております。

今後しばらくは気を緩めず感染予防に細心の注意を払い、コロナが終息する事を願いながら、本年は皆様にとって健康で充実した年であります様、心からお祈り申し上げます。

新年のご挨拶

野田村議会議長　廣内　和之

明けましておめでとうございます。会員の皆様におかれましてはコロナ禍による移動の制限が強いられた年末年始ではあったものの、静かな新年をお迎えのことと存じます。

貴会におかれましては、平成元年に設立されて以来、会員相互の親睦を図るとともに首都圏と野田村とをつなぐ架け橋となるべく、交流事業や情報発信などの活動を続けてこられ、野田村の伸展に大きく寄与されております。久慈士郎会長をはじめ、歴代会長並びに会員各位のご尽力に対し、深く敬意と感謝を申し上げます。

さて、今年の干支は「丑（牛）」であります。その昔、牛1頭あたり100㌔以上の塩袋を背負い、牛方1人で7～8頭の牛を連れて野田から盛岡そして秋田県まで、交易、農業に欠かせなかった牛を大切にし、工夫を重ねて険しく長い道を先人たちは歩みました。今冬は、近年にない寒さと降雪がありましたが、牛のように、牛方のように忍耐強くありたいと思ったところであります。

また、平成23年3月11日の東日本大震災大津波の発災以来、村民一丸となって復興への歩みを進めてきましたが、10年目という復興完遂の節目の年を迎えます。今般の新型コロナウイルス感染症にあっては、岩手県内でも感染者が増えており、不安と困難を抱えておりますが、特にも緊急事態宣言下の首都圏で暮らす皆様におかれましては、そのご苦労は計り知れないものがあると思います。1日も早く収束し、皆様とお会いできることを切に願っております。

結びに、大都会で培われたご見識とネットワークにより、野田村に対しましてなお一層のご指導とご提言を賜りますようお願い申し上げますとともに、貴会のますますのご発展と会員各位並びにそのご家族の皆様のご健勝とご多幸、そして、災害のない明るい年となりますことをご祈念申し上げ、新年の挨拶といたします。

忘れないぞ！3・11！
被災者・関係者4人の記録

10年を迎えるにあたり、今号では、「忘れないぞ 3・11」をテーマに、その当時の様子など、4人の被災者、関係者の方に得がたい玉稿を寄稿していただきました。心が痛む被災状況の写真も掲載しました。そして、村をあげての復旧復興の成果、まだ道半ばかもしれませんが、ふるさと野田村の今の姿の一端も見てほしいと思います。3・11のあの日に学び、子々孫々を守るために「想定外」をできるだけ想定してしていけたらいいなと願っています。

2011年（平成23年）3月11日午後2時46分、三陸沖を震源として、マグニチュード9、予想だにしなかった東北・ふるさと野田村を襲った大地震・巨大津波。あの忌まわしい東日本大震災から10年を迎えます。未曾有で想定外の大被害を被ったふるさと野田村の被災光景は、昨日のことのように鮮明に脳裏に浮かんできます。

初めての体験、大混乱の中で言葉に言い表せない不安と絶望、そんな中で、回りの人々や見ず知らずの全国の、いや全世界の人々の温かさと情けから、生きる希望が持てましたと被災者が語るのを聞きました。

私たち、はまなす会でも「野田はまなす会災害義援金募集委員会」をいち早く立ち上げ、募金活動を始めました。会員の故郷を思う熱い心で、総額約271万円がすぐ集まり、全額村に贈呈しました。

ふるさと野田村は、いち早く復旧・復興事業に、目に見える形で邁進しました。関東圏に住んでいる私たちはまなす会の会員は、新聞やテレビの報道でその様子を心で応援しながら注目して見ていました。

震災のあの日

中野佐加恵（74）
新山出身
野田中昭和37年卒
被災時　北区在住
現在　盛岡市在住

スゴク揺れて、身の置きどころない恐怖心が襲いかかってきた。その時、近くの友達の家にいたので「外に出よう」と声をかけて、外に出たはいいが、立っていられなくてしゃがんだったか、二人で支え合ったか覚えていない。上を見ると電線が千切れるのではないかと思うほど揺れてしなり、地震の強さが見てとれた。「おっかなかったなぁー」身体も声もガクガクで身震いがしばらく止まらなかった。

少し収まったので、急いで自宅へ走った。夫が茶タンスを押さえていた。あの凄まじい揺れなのに物が壊れるとか、上から落ちるとかはなかったのが不思議だった。20分ちょっと間があって、ただ事ではないと直感したので、水を止めた。それから程なくして水道も電気も止まってしまった。

夫が懐中電灯を用意するために2階に上がって、窓から外を見たら、松林が激しく揺れて、波しぶきなのか砂ぼこりなのか、白く舞い上がり「津波だ」と分かり、すぐ車で海と反対方向にある野田駅の方へ向かった。東京にいる次男から「早く逃げて！」と強い口調で携帯電話が入った。すぐ、十府ケ浦の松林や城内が見える中新山の高台まで車を走らせ、お墓通りの私の実家の畑の所に着いたら、30人以上の人たちが既に集まっていた。口々に「もうダメだ」「大きかったよ 今」とか悲鳴を上げて、恐怖と落胆で皆青ざめて見えた。私たち夫婦は必死の思いで車で避難中だったので、城内の家街並みをのみ込む大きな波は直接見る事はできなかったが、城内の旭町あたりは、壊れた家や泥水なのか黒々と変わり果てた恐ろしい状況が見えた。津波のすごい威力に言葉もなく、足がすくみ、私たちもそこにいた人たちも混乱して、皆放心状態だった。

その夜は、中新山にある夫の生家に世話になった。余震が続き、懐中電灯で夜を明かし、反射ストーブで暖を取り、雪がチラつき寒くて夜が長く感じた。電気・水道が止まっても、本家には昔ながらの「井戸」も、「ボットン便所」もあり助かったし、安心した。この時ばかりは、文明の利器でないことがしみじみと良かったと思った。夜空を見ると煌煌と明るく、月も星もきれいに見えたが、逆に寒さと恐ろしさを増幅しているように思えた。夫は冷え性なので、村で指定した避難所での生活は到底無理、ペットボトルの湯たんぽを作っても、まだ寒い、寒いと言っていた。長男にも無事で本家にいることを伝えられ「ホッ」とした。

3日後ようやく北区の家に行ってみて、夫も私も唖然とした。この惨状はどう説明しても伝えられないと黙ってしまった。松の木などの流木が数えられないくらい壁や窓に流れ込み、家の天井まで突き刺さっていた。木の根っ子がついたままのもの、丸太がギザギザに割れたままのものが散々の状況で我が家に突き刺さり、無残に壊していた。夫や子ども達と作ってきた暖かい思い出の詰まった家が失くなってしまったのは、やはり悔しく残念で寂しかった。自分たちの生命あってこそ良かったと考えなければとわかっていても、落ち込みが深くて、この惨状を受け入れるまで、心の整理は簡単ではなかった。

村中が荒涼として、自然の威力のすさまじさを感じた。どこもがれきの山々、道路もなく、役場も混乱で、対処が滞っていたようだ。仕方がなかった。皆で譲り合った。

住宅街に流れ込んだ多数の防潮林

行方不明のままだった愛犬「ジョン」が死体で見つかった。夫と二人で泣きながら葬ってやった。まさかここまで津波が来るとは、浅はかにも思わなかった。

本家に一週間お世話になり、その後は、宇部にある妹夫婦の空いている家を借りて2か月住んだ。本当に助かった。道路も少しずつ良くなり、宇部から野田にいろいろな手続きのため通った。「津波で大変だったね。」と宇部の多くの方々も手をさしのべてくれ、そのたびに涙した。

2ヶ月後に野田中学校に仮設住宅ができて入居した。生活用品が全部そろっていて、本当に感動して ありがたくて人の情けに感謝した。私は集会所で手芸に夢中になり、気を紛らわすようにした。大勢の方々から支えていただき、励ましや優しさ、勇気をもらい少しずつ前向きになれた。

急ピッチで建設が進んだ中学校仮設住宅（平成23年5月撮影）

思いもよらないこの惨状に疲れたのか、夫はその翌年、「黄泉の国」へ旅立った。絶望的でつらく悲しかった。しかし、夫はもっと生きたかったはずだし、無念で悔しかっただろう。夫は私が落ち込んでいる姿は見たくないはずだ。私のやることは夫の分まで生きて、偲んでやることではないかと思ったら気分が軽くなった。

震災10年を迎えるに当たって思うこと、「人は人に助けられて、生かされている。」理屈抜きでしみじみと感じている。

無事に妻と再会し、安堵

大沢 政廣(74)
旭町出身・在住
野田中昭和37年卒

10年前のあの日は、夜になっても妻の居場所が分からず、「波に流されたのではないか」と心配が募りました。妻も同じように不安が頭をよぎったようです。旭町の曲渡橋のそばの自宅は全壊でしたが、翌日無事に妻と再会でき、心底安堵しました。

3・11地震発生の時、私は仕事で田野畑村の港にいました。丁度休憩で、車の中で新聞を広げていました。激しい揺れはただ事ではないと揺れの異常さに気づき、車の窓を開けて「逃げろ」と回りの人たちに大声を掛けながら、急いで海から離れるように避難しました。

しばらく高い所で海の様子を見ていましたが、国道45号の海岸を帰るとトンネルの崩れなどがあれば危ないと思い、岩泉を回って帰りました。山間を走っていたので、津波の様子は見ていません。野田に帰ったのは午後7時頃でした。北区の大沢園芸店のあたりに来たら、知り合いの消防団員達がいて、これ以上、城内の方には行けないと言われました。車を預け、歩いて避難所となった久慈工業高校や海蔵院に行って妻の姿を探しましたが見つかりませんでした。その晩は前田小路の姉の家にお世話になり、心配しながら一晩過ごしました。

役場2階からの光景（平成23年3月12日撮影）

翌朝、村役場の2階から、本町や旭町、海岸方向を眺めるとあっちもこっちも、がれきの山になっていました。私の家があった場所は、津波で流されてきた何メートルもある大きな木や、近所の家の物が雑多に積み重なって、見るも無惨な状態でした。

ヘリコプターの音がするので、驚いてみていると、近くの岩手銀行の屋上からヘリコプターが妻をつり上げていくのが見えました。ヘリコプターは久慈市内に向かったと聞き、すぐ迎えに行きました。妻は他の避難者と一緒に、元気のない表情でおかゆを食べていました。「また一緒に暮らせる」とほっと安心した時の事は昨日のことのように思い出します。

震災後は、前田小路に一軒家を借りて4年間住んでいましたが、やはり一番落ち着くのは自分の家しかないと思い、息子の協力もあって、元々自宅のあった場所に建て直し、現在住んでいます。復旧工事として、現在地は前より80センチから100センチほど土地をかさ上げされていました。また、津波への備えとして、海岸に一番近い所に前より高い14メートルの第一の防潮堤、二番目にリアス線の線路の堤防、三番目に十府ヶ浦公園の堤防と3段階の防波堤があるので、震災前よりかなり安心ではあります。

しかし、2011年の「3・11」の教訓は後世に是非語り継いでいかなければならないと思っています。津波が来たら、「津波てんでんこ」で、それぞれがいち早く、まず高い場所に逃げ、命を守る事が一番大事であると教えていこうと思っています。

ヘリコプターで救出される被災者（提供：きてきて久慈市）

東日本大震災から10年

忘れないぞ！3・11被災の記録

午後2時46分、大地震発生の40数分後、最大水位約18㍍、最高遡上波約38㍍の巨大津波がふるさと野田村に襲来しました。被害状況は　死者37人（うち村民28人）、震災関連死1人、住宅被害515棟でした。住宅密集の城内地区で海岸に近いところはほとんど破壊され流されました。防潮林・防砂林として幼少の頃から親しんできたあの松林は見る影もなくなぎ倒されていました。中沢、新山、城内、泉沢、南浜、米田、玉川、下安家など海岸沿いの地区は甚大な被害を被りました。その光景は涙無くして見ることはできません。

港地区を襲う巨大な津波（住民提供。平成23年3月11日15時38分撮影）

ひびの入った防潮堤に2度目の大きな波が襲い掛かる（平成23年3月11日15時38分撮影）

第2波は港地区の海面高12㍍の防潮堤を軽々と乗り越えた（平成23年3月11日15時39分撮影）

大鳥居前のがれきの様子（平成23年3月12日撮影）

店舗内から逃げ遅れた者の救出活動をする自衛隊員（平成23年3月12日撮影）

国道を乗り越え南浜地区に侵入した津波（住民提供。平成23年3月11日15時37分撮影）

村で最も住宅が密集していた城内地区は、一瞬のうちに焼け野原のような風景になりました（陸上自衛隊ヘリコプターから平成23年4月撮影）

復興・発展する ふるさと野田村の今

ふるさと野田村では、被災から直ちに被災者の救援、生活の再建に向けてがれきの処理、道路の整備、仮設住宅の建設などに全力を尽くしました。安心・安全で活力ある魅力ある村づくりを基本理念として復興計画を策定し、強力に取り組みました。発展するふるさと野田村の今の姿を見てください。

現在の本町通りの様子

平成 23 年 8 月　復興まつりの開催

平成 29 年 3 月　津波避難ビルの機能をもつ保健センターが完成（茶色の線は 3．11 浸水高）

平成 23 年 10 月　定置網漁が復活

平成29年 3 月三陸鉄道　十府ヶ浦海岸駅が完成

平成 26 年 4 月　三陸鉄道が全線開通となる

十府ヶ浦に新設された防潮堤（海面高 14㍍）

平成 27 年 4 月　村最大の新町高台団地が完成

役場前に押し寄せた多数のがれき（平成 23 年 3 月 12 日撮影）

旭町付近の住宅街に押し流された三陸鉄道のレール（平成 23 年 3 月 12 日撮影）

ばらばらに粉砕された防潮堤（平成 23 年 5 月撮影）

映画「浅田家」のモデルになって

小田　洋介（35）
本町出身
野田中平成12年卒
現在神奈川県在住

野田村本町出身の当時大学院生であった小田洋介さんは、被災して散乱していたアルバムや写真を洗浄し、乾かして、被災者に返すボランティアをしていました。その活動が題材となって、映画「浅田家！」が製作され、令和2年に全国で上映されました。そして、第36回ワルシャワ国際映画祭で日本初の「最優秀アジア映画賞」を受賞しました。

その小田洋介さんに3・11を偲びながらインタビューに答えていただきました。

始めに、自己紹介をお願いします。

野田はまなす会の皆さんお久しぶりです。はまなす会の「ふるさと交流会」でお会いしたことがある小田洋介と申します。

1985年（昭和60年）生まれで、久慈高校卒業です。現在自宅は神奈川県川崎市で、千葉県市川市の中学校に勤務しております。週末は4才の息子と2才の娘と公園で遊んだり、家族でアウトドアを楽しんでいます。

3・11の時はどこにいましたか？　被災状況を見ての思いは如何でしたか？

2011年は千葉の大学院に通っていました。3月11日は幕張メッセで着ぐるみのアルバイトをしており、いざステージ上でじゃんけん大会が始まる直前に揺れ始め、急いで屋外に逃げました。屋外も道が歪んでいたり、マンホールが高く浮き出ていたり、ただ事ではない地震に恐怖を感じました。その時は関東が震源かと思っていましたが、数分後、東北が震源と聞き、慌てて実家へ電話をかけました。電話は繋がらず、ショートメールでようやく父と連絡が取れました。

とりあえず、住んでいた千葉市の自宅まで帰ろうとしましたが、電車も不通。道で初めてヒッチハイクをし、自宅に戻ることができました。その後も母と連絡がつかず、岩手へ向かう事を決めました。その日のうちに関東在住の友人と連絡を取り、翌日、野田村出身の友人と4人で車で野田村を目指しました。出発したものの、もちろん高速道路は使えず、下の道も通行止め等なかなか北上できませんでした。途中、福島原発のニュースが聞こえ、なるべく遠くを通ったり、ガソリンが切れてスタンドも使えず、山形県の友人宅からガソリンを分けてもらったり、右往左往しながら2日か3日後ようやく野田村に着きました。

役場前で写真返却を始める小田さん（提供：きてきて久慈市）

実家の被災状況は？　本町、旭町の被災状況は？　家族の避難状況はどうでしたか？

野田村へ到着後、すぐ実家へ向かいました。道は瓦礫だらけで、いつもの野田村はそこにはなく、荒れ果てた街の風景に言葉も出ませんでした。村役場から本町の実家までは、通常2～3分ほどでたどり着きますが、当時は瓦礫を掻き分け、上り、下りして20～30分ほどかかりました。実家は家々が重なり合い、2階一部がかろうじて残っていました。その実家前でようやく父と会うことができました。母のことを尋ねると親戚の家にいたとのこと。祖父母も避難して、家族全員無事でした。

被災写真の返却ボランティアを始めた動機は何ですか？

その後、母や妹、友人と家財を運び出しました。途中自衛隊の方にも手伝っていただき、アルバム等を運び出しました。その道端に、各家々から流出した写真やアルバムが散乱しているのが目につきました。その横を重機が道を拡張するために動いていました。このままだと、この写真も瓦礫になってしまう気がしました。そんな時、知人の写真を見つけ、届けたところとても喜んでもらい、瓦礫になる前に拾い集めなければと思い始めました。友人の協力も得てアルバムや写真を集め、田中時計店のお店前の一角をお借りして返却場所としました。

生涯学習センターでの写真返却（平成23年4月撮影）

捜索に出た消防隊員や自衛隊の方も捜索後に瓦礫の中に落ちた写真を届けてくれました。数日後には写真やアルバムの数も増え、広く多くの方の目にとまる野田村役場前をお借りして、活動場所としました。

その後、たくさんのボランティアの皆さんの協力を得て、写真洗浄をお手伝いいただいたり、掲示方法のアイディアをいただいたり、写真を探しに来られた人から、残る写真の持ち主情報を聞いたりしながら、地道に返却されていきました。現在は野田村の「チーム北リアス写真班」が写真返却の中心となり、「写真返却お茶会」などをしながら現在も続けています。

現在も地道な返却活動が続いています

★被災写真返却ボランティア活動と映画「浅田家」の関わりを教えて下さい。

震災当時、周りの皆さんは瓦礫を一生懸命片付けているのに、写真を集めて持ち主に返す活動は正しい事なのか？今やるべき事なのか？何度も自問自答していました。ただ、写真を見つけられた人はとても喜び、「ありがとう」と言っていただき、その言葉に支えられて、活動を続けました。活動初期から、野田村の方々や村外・県外の多くの皆さんの協力を得て活動ができています。

映画の主人公、写真家の浅田政志さんとは、その活動中２０１１年（平成23年）４月に役場前で声をかけていただき一緒に活動しました。その時の出会いが現在も続いており、10年も繋がっている事がとても不思議であり嬉しいご縁です。当時から写真の洗浄の仕方や持ち主への返却方法について沢山助言をいただき、何度も野田村へ足を運んで活動していただきました。

映画「浅田家」では、菅田将暉さんが演じる「小野陽介」は私がモチーフになっていますが、全国の写真洗浄返却に関わる皆さんの思いを「菅田」さんが演じられているように思います。菅田さんも中野監督も本当に丁寧に当時の様子や写真洗浄返却のお話を聞いていただき、撮影現場でも優しく声をかけてくださいました。

この映画は家族愛にあふれたとても素敵な映画です。この映画で沢山の方々が笑顔になり、野田村のさらなる盛り上がりに繋がれば嬉しいです。

★ふるさと野田村の誇りに思うことがあれば教えて下さい。

高校時代まで生活していた野田村を離れて、村の温かさを再認識しています。幼少の頃から親しんできた村の祭りや色々な行事、そして地域の方々に育てられたことなど、誇りに思います。「集まれ野田っ子」で塩の道を歩いた経験、なもみ太鼓、直心館での稽古、鮭の掴み取り、山車作り、盆踊りなど、子どもの頃に体験した記憶が今も焼き付いています。この地域の皆さんと共有した時間そのものが財産で有り、誇りです。

野田はまなす会

正副会長会議　開催される

去る、令和２年 11 月 29 日（日）午後１時から、「入間市扇町屋第一区自治会館」において、野田はまなす会の正副会長会議及び会報の編集会議を開催しました。出席者は顧問 桜庭、会長 久慈、副会長 米田、山根、幹事長 坂本、副幹事長 志村の６名でした。本来なら、幹事全員出席の役員会としたかったのですが、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、やむなく少人数のこの形を取らせていただきました。ご了承ください。会議では、令和３年度の総会及びふるさと交流会の期日と会場を令和３年 11 月 28 日（日）午後２時から、会場は日暮里の「ラングウッド」と決めました。

引き続き、野田はまなす会会報の編集会議を行い、令和３年３月 11 日は震災から 10 年となることから、「３・11 東日本大震災」特集号とすることにしました。

正副会長会議に出席した６名

東日本大震災大津波 あの時私は！

上山　晃(46)
野田中平成元年卒
現在久慈市在住

平成23年3月11日の東日本大震災の大津波から早10年が過ぎますが、震災で亡くなられた方に対しまして、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

震災時、私は野田村役場総務課内にある総合政策室の職員であり、総務課企画調整班と共に仕事をし、その時の広報担当は、現在の広報担当で、はまなす会会報担当の島川主査でした。

午後2時46分頃、大きな揺れと長時間の地震があり、広報担当が取材に行くとの声を聞き、一人で何かあったら危ないと感じ、対策本部会議が参集されたと同時に、広報担当と出発しました。

現在、野田港の入口に水門があり、その場所で、新山地区の2分団の消防団員と野田湾を観察していました。記憶では割と長い時間が経過した後に、普代村や下安家地区の岸壁をえぐるような想像もしない大津波が見えました。即座に団員から「逃げろ、逃げろ」の声が聞こえ、一斉に避難しました。これまでお台場公園を超えた津波はないとの記憶と、少しでも遠くて高いところの港地区の2分団2部屯所付近の2つの考えが頭をよぎりましたが、広報担当の後ろから、全速力でお台場公園の階段を駆け上がりました。

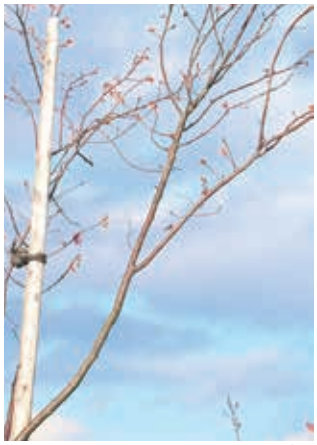
直後に広報担当から動画を撮影してほしいとの声、私は動画、広報担当は写真撮影と分担し、構えた直後、もう野田村の明内川・泉沢川付近は大津波（実際は海面が想像もしないような上昇）以外何も見えませんでしたが、港地区の防潮堤（海面高12㍍）を越波する瞬間は撮影することができました。

私は撮影中、引き波による野田港の灯台付近の海底を見た瞬間、想像もしないことが起きていると感じ、村を見渡すと防潮堤が倒され、火事が起こっている情景は、何度も何度も喪失感（もう野田村は終わった）に襲われました。

村の復興計画策定に携わっていただきました、故前岩手大学堺茂樹学長の言葉で「避難する時は少しでも海岸から遠く離れて、できる限り内陸に避難するように」を思い出し、今でもあの時、私の行動は正しかったのかと自問自答する時があります。

復旧復興のために野田はまなす会から、応援の気持ちが込められた見舞金や緑化協力募金をいただいております。担当を離れ、ご無沙汰しておりますが、今もなお、少しでも野田村のためにと思っているところです。

未曾有の大震災を後世に伝えるための文章であり、お許し願えれば幸いです。



春を楽しみに待つ緑化協力募金で整備した桜

あとがき

◆No.62号の今号は、10年目を迎えるあの東日本大震災の事を中心に編集しました。関係者に寄稿いただき、誠にありがとうございました。10年前の情景が目に浮かぶようです。

◆小田洋介さんのボランティア活動がテーマになって映画化された「浅田家」の映画、すぐ映画館に行って見ました。ほんのりあったかい、いい映画でした。野田村が「野津町」に、「小田洋介」が「小野陽介」になっていました。

◆マスクを着用して、三密（密閉・密集・密接）を避け、コロナを予防しましょう。

（S・S）

2021年度・野田はまなす会

総会・ふるさと交流会開催のお知らせ

令和３年度の総会・交流会は、以下のとおり開催する予定です。野田村出身者や関心のある人など、どなたでも参加できますので、友人・知人を誘ってぜひご参加ください。

コロナ禍の状況により開催を取りやめる場合もあります。詳細は、９月発行の「はまなす通信 No.63 号」でお知らせします。

日時　令和３年11月28日(日) 午後２時～
会場　**ホテルラングウッド**（東京都西日暮里 5-50-5）
※例年と異なる会場です
最寄駅　ＪＲ：日暮里駅南口　下車　徒歩２分
費用　交流会費６千円・年会費３千円
※中・高・大学等新卒者は無料招待します。

問い合わせ
会　長　久慈士郎　☎090・5567・5795
事務局　野田村役場未来づくり推進課
☎0194・78・2963

発行：野田はまなす会
編集：野田はまなす会事務局☎0194・78・2963
（野田村役場未来づくり推進課）